

## まとめ

コーディネーター

鈴木雄雅 (文学部新聞学科教授)



これまでゲストの方のお話を聞きながら、みなさんの反応を見てきた「私にとって仕事とは—ソフィアンが語る」も3年目になります。来年からは少し衣替えをいたしまして、国際公務員や国連などで働く人たちを招いての授業になると聞いております。

大学生の就職活動が年々早まっています。現在すでに就職活動を終え、就職が内定している3年生もいるようです。私は、短大が4大化したとき、4大は短大化すると明言しましたが、現実にもそのようになってきています。

1年生授業の中でジャーナリストになるための資質、素質をどうやって磨くかといった話をするがありますが、それはまたごく普通に皆さんにあてはまることです。まず、ジャーナリストに限らず、情報アンテナを磨くということが大事です。講義の進行の中で木島さんが講義される方のことを事前に調べて授業に出るようにと、何度も話されていたように、情報を持たないで聞くのと、持ってから聞くのでは、情報摂取量、解釈度が大きく違ってきます。これはごく基本的なセンスの問題ですが、大変重要です。レポートやアサインメントの書き方や締切時間を守るということも日頃の積み重ねです。

また、モラルも問われます。最近、テレビ放送の中で捏造された情報が流され問題になっています。また、消費期限切れの商品を使用した加工食品の使用など、考えられないことが起きています。もし、皆さんが就職してこのような現場に出会ったらどうしますか。社会に出るとこうしたことが日常的に問われます。

いまや社会的な価値観は揺れ動いています。これまでの常識では通用しないこともあります。学ぶプロセスの中では失敗をして学ぶということも多々あると思います。その失敗を恐れることなくいろんなことを学ぶことができる年代です。その中で情報アンテナを磨き、体

力・知力・好奇心・冷静さ・常識を磨いてください。

私は大学の4年間は「学ぶことを学ぶ」、何を学ぶかを学ぶ場であると考えています。ただ、その中で基本的にみると、やはり普段の学習のなかでいろいろと経験を積み重ねることだと思います。社会には見える落とし穴、見えない落とし穴が無数にあります。とくに情報化社会では実体験に乏しく、情報による疑似環境に取り囲まれています。わかったつもりで、実はわかっていない。自分がどれほど分かっていたつもりで、分かていないかを知ることも大切です。

そういう意味で、「学習=習ふことを学ブ」ではない「学問=問ふことを学ブ」姿勢をこの4年間でしっかり身につけることが、将来の皆さんの人生を決めると言っても過言ではありません。

いま、学内共同研究『第三次 上智大学卒業生の生活と意識』という卒業生調査を行っています。まもなく結果がでます。大学で学んだことが現在の社会生活の中で影響しているかの項目で興味深いのは、語学や専門教育の影響度が高いのはわかりますが、教師とのコミュニケーションという回答が中位に位置していることです。必ずしも学問というかたちではなくとも、一番身近にいる教員とのコミュニケーションから学ぶものもたくさんある、ということではないでしょうか。

年齢のせいかな、最近私の人生に影響を与えた人の話をしてほしいと頼まれることがあります。今回の寄付講座でもあなたたちのこれからの人生に大きく影響をあたえた人もいらっしゃるのではないかと思います。

今回の講座を受けたみなさんが社会に出て、その後、この場所で、また、あなたがだれかの人生に影響を与える人になるかもしれません。そういうことがあってもいいと思いませんか—。